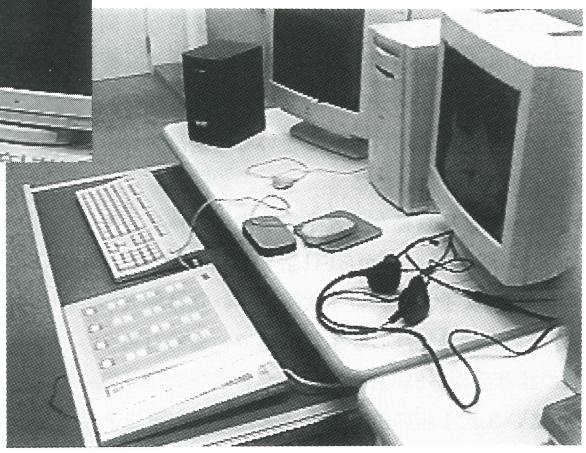
0-4-5

ISSN 0288－1594

# AV JOURNAL

1997年3月 第27号



（マルチメディア語学自習室）

## 目　次


'Folklorc' なものの永久保存
—対馬と東アフリカの経験—……宮本　正興……2

『マルチメディア言語・文化センター』構想
—テレビにあふれるインタラクティブという言葉を考える—……林田　雅至……4

インターネットを用いた教育の可能性と現況……堀　一成……5

マルチメディア語学自習室の利用開始について……7

平成8年度（4月～12月）テープ・ライブラリー利用統計……11


大阪外国語大学

# 'Folkloric' なものの永久保存

## ――対馬と東アフリカの経験――

附属図書館　館長　宮　本　正　興

日本昔話研究の権威、稲田浩二先生（当時、京都女子大学）につれられて、長崎県の離島、対馬の総合調査に参加したのは今から20年ほど前、75年８月と翌76年８月のことだった。この間、のちに『対馬の昔話』（日本放送出版協会、1978年刊）を一緒に上梓することになった西南学院大学文学部の山中耕作先生と二人で、第１回調査の補足と第２回調査の準備のためにもう一度玄海灘を渡ってもいる。その時には、北端の比田勝から南端の豆酘まで、途中で何泊かしながらこの島を縦断したのだった。

対馬の人々は昔も今も半農半漁の生活を送り、同時に島の90％を覆う山林の伐採に従事している。痩せた農地で耕作に従い、いかつり船で四海に揺られ、そして炭焼き仕事に明け暮れるというのが島民の伝統的な営みであった。

第１回調査は、京都女子大学の学生が主体で、総勢36名、144名の語り手から641話を採録した。第２回調査は京都女子大学、日本女子大学、立命館大学（当時の私の勤務先）の学生が主体で、総勢71名、257名の語り手から836話を採録した。

たいてい２人１組のチームを組んで、各戸をまわるのである。筆記具とテレコ、それに柳田の『日本昔話名彙』は必携である。各戸をまわるほか、各町教育委員会、老人クラブなどの配慮で、あらかじめ集会所などに集まっていただく場合もあった。

そんな折の忘れられない思い出がある。第２回調査には、稲田先生と並んで、これまた昔話研究の大家であられる小沢俊夫先生（当時、日本女子大学）が同行された。私がある集会所を訪れると、小沢先生のチームが先着しており、まさかとは思ったが、先生は一升ビンを手にした20名ほどの島民に囲まれて、「昔話」ならぬ、戦前戦後の「思い出話」に花が咲いていたのである。「毒（注、昔話研究の魅力のこと）食わば皿まで」と、腹を決めて飲めや歌えの大騒ぎの渦中におられた先生は私の姿を見つけるや、あきらめきった調子で言われたのだった。「宮本さん、これじゃあ、もうお話になりません」。

対馬調査では今も忘れられない語り手が２人おられた。１人は上県町佐須奈の佐伯ヨシエさん（明治29年生まれ。故人）である。「むかしやったげならのう」と切り出し、「そればっかりのとおざぶろう」と結ぶ。そのやさしく、美しく、魅惑的な語りのなかに遠い祖先が息を吹き返してくる。そして、一話をはなし終える度に「そげな話も聞いちょる」と小声でこぼし、反応を確かめるように聞き手の顔を順に見つめられるのである。もう１人は下県郡厳原町久根田舎の初村九郎助氏（明治43年生まれ）である。子供の頃には囲炉裏端で、青年に達してからも炭焼き仕事の合間などに仲間どおしで昔話を語り合ったという。男性の間だけで語り合ったもの（艶笑譚）が多く、いかにも話好きな性格とエンタティナーとしての面目が身振りや声の抑揚に躍如としていた。

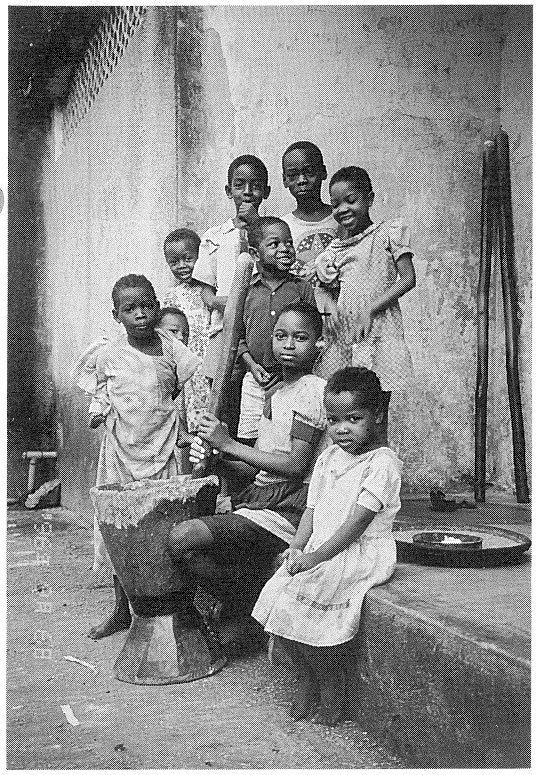
今、世界各地で伝承の途絶を嘆く声が聞かれるが、対馬も例外ではなかった。その昔話世界は多様性には富んでいたが、個々の話の文芸的成熟度はいま一歩の感が深かった。このことは、伝承が語り手の記憶のなかですでに崩壊に瀕していることを想像させたし、外来の伝承の土着化の弱さをもうかがわせたのである。

対馬のほかにも、稲田先生につれられて、何度か日本昔話の調査を体験できたが、こうした経験がのちの東アフリカ各地での言語調査や昔話調査を主体とする私のフィールドワークに役立った。

ごく最近の96年夏にも、私は大陸本土から離れてインド洋上に浮かぶラム島（ケニア領）やザンジバル島（タンザニア領）といったスワヒリ文化のメッカの地で昔話調査に従事できた。そしてこの時にも、伝承の途絶は決定的だとの印象を強くしたのである。

第一、子供たちが昔話にそれほど興味を示しているようには思われない。

テレビやラジオ、映画やディスコ、フットボールなどの人気スポーツがあるなど、子供たちにとっては家の内よりも外に楽しいことが一杯あるのはいずこも同じである。しかも都市化や核家族化の現象が激しい勢いで進行し、近代の学校教育が伝統的なコミューンの価値や生活を破壊しつつある。



ザンジバル島マクンドゥチ地区の子供たち

ともあれ、昔話、伝説、ことわざ、早口言葉、なぞなぞなどの言語遊戯を採録し、語型やモチーフを考え、解説を付して刊行してしまうと、それで仕事は終了してホッとする。ところが、文字に移して刊行してしまうと、今度は資料がひとり歩きをはじめる。つまり、たまたま採録した話がある特定の話型の標準タイプででもあるかのように思われてしまうことがよくある。それが教科書や教育委員会発行の冊子などで紹介されると、人々はそれの権威の前で、自分流のものを話したがらないことが多いのである。

文字の権威が伝承の途絶を誘うとはこのことであろう。だから、翻字と刊行の仕事はこわい。語りのままに翻字することはまず不可能だし、文字はその場の雰囲気を伝えてくれない。文字資料だけでは、昔話はその最も人間的な、コミューナルなぬくもりの大部分を喪失してしまうのである。

旧著『対馬の昔話』を今読み返してみると、もはや採録時のあの感動は私にとっても甦えってこない。そんなわけで、私は時々、過去に採録したテープを取り出して、語り手の肉声に耳を傾けることがある。すると、タイムカプセルの効果よろしく5年、10年、20年前のアフリカや対馬の記憶がしだいに鮮明になり、今は亡くなったなつかしい語り手、2度と会えそうにない旧い友との再会を果たすことができるのである。それだけに、最近盛んになってきた映像人類学の専門家たちが、世界各地の人々の慣習や儀礼、踊りその他のフォークロア的、多面的な民衆文化を総合的にビデオに収録してくれているのは心強い。ビデオ、映画、テレビ、ラジオ、はてはインターネットといった近代技術を駆使して、世界の諸民族の衰退しつつある伝承文化を再現させることは大切だ。口頭伝承のように、文字に依拠しない文化表現には、必ず身振りや歌、そして独特な舞台設定が伴うものである。視覚的イメージと声や音など聴覚に訴えるものを統合し、それらをテープに吹き込み、フィルムに焼きつけ、スクリーンの上に永久保存できれば、どんなにすばらしいことだろうか。しかし残念なことに、こうした伝統文化遺産については、特にアジアやアフリカの人々にとっては、自らの豊かな伝統をたがいに発見できるより前に、人知れず急速に失われつつあるようだ。最近にも、西アフリカで年老いた著名な語り手（グリオ）が息を引きとった。一冊の浩瀚な百科事典が永久に失われたと、その死が悼まれている。

# 『マルチメディア言語・文化センター』構想

## ――テレビにあふれるインタラクティブという言葉を考える――

視聴覚教育委員長
地域文化学科・ヨーロッパⅢ講座
（ポルトガル語コース）
林　田　雅　至

この１年ほどテレビ画面からこぼれ落ちるほどにインタラクティブという言葉は発信され続けた。ハード面の極端な進歩という状況の中で、テレビ視聴者は物心両面においてマルチメディア機器支配に翻弄されることなく、人間的な関係を維持しながら、インタラクティブにハイテク技術とのつきあいをしているというイメージを広く宣伝するために好んでインタラクティブという響きのよい言葉は繰り返し、コマーシャルのレベルから文化討論会のレベルに至るまで囁かれてきたのである。

確かに、全世界的なコンピュータ機器の導入によって日本では従来型の《揃える教育》――戦後日本の高度経済成長を支えてきた均質な労働力を生んできた――と《違える教育》の差異に対する認識が顕著化している実情を前提としながら、伝統的に《揃える教育》を底支えしてきた《教える》という概念に基づいて行なわれてきた従来の視聴覚語学教育研究の枠組みを包含しながらも、われわれはその枠組みを超越していかなければならない。ただ、《揃える教育》を一概に否定出来ないのは長年培われてきた方法論であるとともに、異論はあるかもしれないが、日本人の特性を生かしたものだと思うからである。

ところで、相対的な円高は学生をして容易なる海外観光・研修旅行実現を可能ならしめている無視できない状況が存在し、既にステレオタイプ的な会話ではカバー出来ない実態があって、《教壇から教え、学生が受動的に教わる》という枠組みの中で機械的にインタラクティブと称して伝授されてきたステレオタイプ的会話の文例などではもはや満たされないという学生側の強い欲求に対応する必要性が増大してきている。コンピュータの導入によって逆説的にではあるが、語学教育の現場において機械任せに終始しない、対人間的双方向という意味でのインタラクティブという考え方は今後ますます重要性を帯びてくることを強調しておきたい。従って、実質的に対面インタラクティブを基本概念とする効果的な語学学習法・意志伝達法の時代に適応したマルチメディア型外国語教材開発を目指さなければならないだろう。

**『マルチメディア言語・文化センター』**において、大局的に利用者が一市民として日常生活に過密に氾濫する多種多様な情報を、能動的に批判精神をもって処理・解釈できる視点を養えるようなメディア教育研究を諸外国の高等教育機関の協力・支援の下に地球規模で総合的に行い、その成果を利用して、広く言語および非言語によるマルチメディア型外国語・文化教育に対する理論的で実践的な基盤を与え、そしてこれに基づいてインタラクティブな言語・文化教育を実践することになるだろう。それゆえに、センターの実態というのは、情報の集積と発信――厚顔無恥を覚悟の上で言うと、ここで述べるマルチメディア型語学教材というのは完成された一種の芸術作品と捉えることが可能である――を主眼とし、place of study――ヘレニズム時代アレキサンドリアの王立研究所（ムセイオン）を思い出してみてはどうだろうか――であって、同時に広く公開的で容易にアクセス可能な存在であるところから、Interactive Language and Culture Museumと呼ぶにふさわしい。

具体的には**『マルチメディア言語・文化セン**

ター』は、まず研究機関として言語学、心理学、文学、歴史学、美術史、美学・映像学、文化人類学、民俗学、宗教学、情報工学、医学などの隣接諸科学の学際的な立場から外国語・外国文化というものを濃密度に圧縮されたトータルな情報として認識し、研究対象としながら、また教育機関として研究の成果を広汎に利用した大胆な発想を基礎とし、使用の簡便性を追求した、コンピュータ完全装備のマルチメディア型視聴覚外国語教育教室を設計し、これを大阪外国語大学で行なわれる語学・文化両領域にわたる授業に提供し、これを通じて大学における言語の研究と教育のための個別言語の枠組みを越えた普遍的な共同の学術的空間（place of study）を構築することを目標としたい。

さらに、同センターはサービス提供機関として広く学内外の研究教育活動に必要な視聴覚教育およびマルチメディア型語学教育研究に関する技術、設備および視聴覚マルチメディアに関わる一切のサービスを提供するとともに、個別言語・文化研究教育のために必要な視聴覚データベースを作成し、同時にセンターの所有する施設、設備、技術、資料、データを国内外の研究者、利用者にインターネットなどによって公開して利用に供し、現在諸分野に分散するマルチメディア型外国語・文化情報に関する研究の統合拠点としての責務を果たすことを目指すものである。

また、本学の外国語教育は今後こうしたコンピュータ完全装備のマルチメディア視聴覚外国語教育教室（収容人員：30名～50名）で実施されてしかるべきであり、総合的に視聴覚すべてに訴える教材・資料提示を行ない、インタラクティブな意志伝達の能力を高めることを目指し、また、語学教育のみならず、機器の使用頻度には関係なく、広義の文化研究・教育に蓄積される学術的成果を授業という形で実践活用するさいにも、分かりやすいプレゼンテーションの手段として、このタイプの教室は遺憾なく力を発揮するはずである。

# インターネットを用いた教育の可能性と現況

国際文化学科・言語情報専攻　堀　　一　成

映像や音声をなんらかの通信手段を用いて電送し、それを素材として教育を行う遠隔講義については、これまで様々な試みがなされており、また実践のための努力も継続されてきた。たとえば、外国の大学で行われている講義を、通信衛星を通して放送し、全世界で受信することにより、非常に多くの人が聴講できることになる。しかし、このような遠隔講義を実現するためには、情報送り出しの設備、通信回線、受信端末のいずれも高機能で特殊な装置を必要とする。このため、大学などでも視聴覚の特別の設備を用いた教室などでのみ、遠隔講義が可能であった。小・中学校などの初等教育においても有効な活用をすれば教育効果が上がると思われるのであるが、設備を準備することができない場合が多く、広く普及するには至っていない。また、その通信形態から、内容が発信側から受け手側への一方向のものになることは否めない。

そこで注目すべき通信手段が、この２、３年に広く一般に知られるようになったインターネットである。インターネットとは、各組織内でのみ運用されていたLANを相互に接続し、その結合を世界中に広げたものである。インターネット上では、接続されたすべての端末が情報の発信と受信を行うことができる。そのため情報のやり取りの双方向性が確保される。そして、その端末には現在かなりの率で家庭にも普及してきたパーソナルコンピューターが使え、通信回路もいわゆる電話回線でも可能であることから、準備しなくてはいけない設備の負担が大変すくない。既存の大学設備に縛られない教育をおこなおうとするバーチャルユニバーシティー構想の実

現には最適のメディアであると考えられる。

ところが、現況でのインターネット環境において、上に述べたような遠隔講義をおこなおうとするには、さまざまな問題がある。特に、リアルタイムに講義を進めるための通信回路の容量が不足していることが深刻な問題である。個人や、小・中学校の保有しているインターネット接続のための通信手段は、公衆電話回線を用いるためのモデムであり、現在その代表的な通信速度は28,800bps（bpsは毎秒何ビットの転送が可能かをあらわした単位）である。一方遠隔講義をおこなう場合など、ビデオ映像信号をやり取りすることが必要になってくる。コンピュータでビデオ映像を扱う際にもっとも良く使われるファイル形式がMPEGであるが、このファイル形式では十数秒の映像で１メガバイトを越えるファイルサイズとなる。このファイルの転送には少なくとも数分の時間を要する。このような状況では快適な情報伝達がおこなえないのは明らかである。

現在の通信状況に妥協せざるを得ないので、そのための様々な通信技術が開発されているが、ここではその中でも注目されている技術の一つであるShockwaveについて簡単な紹介をしてみたい。ShockwaveはMACROMEDIA社のDirectorというマルチメディアオーサリングソフトで作成した簡単な映像や音声をインターネットのホームページ上に置き、WWWブラウザによってその内容を世界中から取得できるようにした技術である。Shockwaveのファイルは、数百キロバイトのサイズにおさえるように工夫がされている。このことが、インターネット上で扱う上において大きな特徴となっている。もっともそのためには、内容となる映像の色数や音声のサンプリングレートが犠牲になっている。リアルな動画像を扱うことは無理であり、簡単なアニメーションが映像の中心となる。しかし、これから例として述べるような応用例には十分なものといえる。

写真１　Shockwaveホームページ

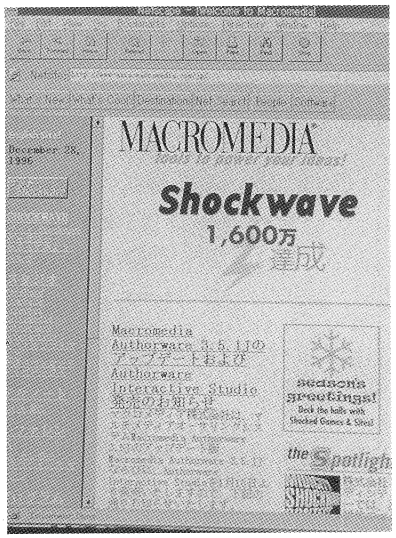



写真２　読売新聞10大ニュース

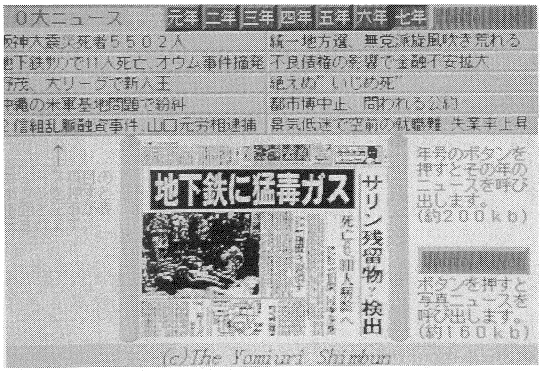



写真１はShockwaveを提供しているMACROMEDIA社のホームページを表示したものである。このページからソフトウェアを貰うことができる。日本で情報提供に活用している例を一つあげる。写真２は、読売新聞のホームページにおける例である。写真からはわからないが、ある年の10大ニュースを報じる新聞の紙面が、巻き物を見るように、流れていくデモンストレーションである。

教育に使った例をあげてみる。写真３と４は同じホームページにおかれているデモンストレーションである。写真３では「どうして糊はくっつくのか？」という題で、接着のしくみの化学的な説明や、各材料に適した糊の選択について説明している。材料の絵を糊の種類の書いてあるパレットの所へドラッグしていくとその組み合わせが適切であるかどうかが表示されるので、色々な組み合わせの適否を自分で試してみることができる。また、写真４に示したのは「パイロットはどのようにして飛行機を操っているか？」という内容である。これも写真では内容が理解しづらいが、画面の操縦のためのボタンをおすと、それにあわせて飛行機が方向を変える。さらにその操縦の名前と対応する簡単な力学的な説明があらわれ、力学の初歩を学ぶことができるように

なっている。

以上見たような例は、あくまでも試行といった段階にあるものであり、必ずしもインターネット上で提供されなくてはならない内容とは言えない。写真3、4の内容などは、現時点では、グラフィックソフト化しCDROMで提供した方が良いと思われる。しかし、このような試みをさらに発展させることによって、また情報伝達技術のさらなる発展によって、インターネットの情報双方向性を有効に使った、従来メディアでは不可能であった教育内容が提供できるようになると信じている。そしてそれは双方向性とリアルタイム性が重要な言語教育において特に有用なものになると考えている。

写真3　糊についてのデモ

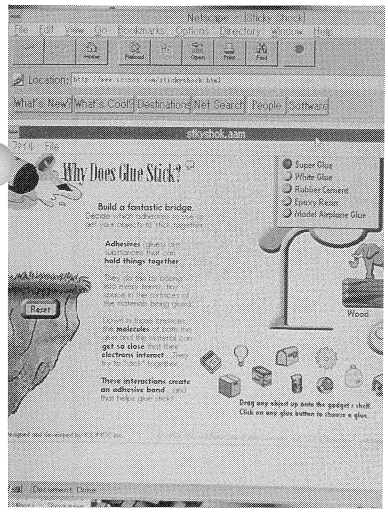
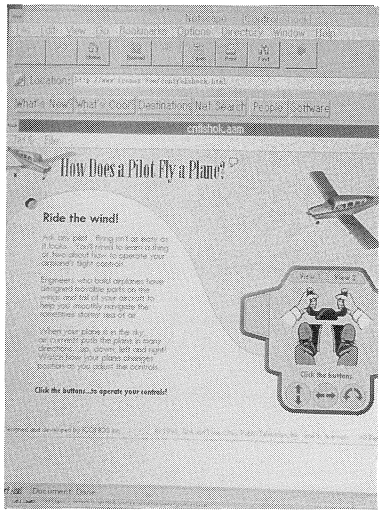



写真4　飛行機についてのデモ




参考 URL

写真1

http://www-asia.macromedia.com/jp/

写真2

http://www.yomiuri.co.jp/MYK/shockwave07j.htm

写真3

http://www.iconos.com/stickyshock.html

写真4

http://www.iconos.com/controlshock.html

# マルチメディア語学自習室の利用開始について

視聴覚資料係

平成9年4月より、図書館棟5階部分にある多目的自習室の利用を開始します。マルチメディア語学自習室は、学生、教職員のパソコン自習、インターネット利用を中心に、パソコン・ネットワーク・システムでの図書館オンライン目録講習会、少人数の語学情報処理教育、研究会等での利用が可能になります。

利用の方法については次の利用案内を参照して下さい。

〈〈マルチメディア語学自習室利用案内〉〉（暫定）

1.　利用対象者

利用対象者は、原則として教職員、情報処理科目等を受講しユーザーＩＤを所持した学生とします。

2. 開室時間

月・水曜日　　9：30～12：30、16：30～18：00

火・木・金曜日　　9：30～18：00

（図書館講習会、研究会等で利用する場合は、使用できないことがあります。時間の変更がある場合には事前に掲示します。）

平成９年度開室時間表

| | 9：30 ～ 12：30 | 13：10 ～ 16：20 | 16：30 ～ 18：00 |
|---|---|---|---|
| 月 | | 授　業 | |
| 火 | | | |
| 水 | | 授　業 | |
| 木 | | | |
| 金 | | | |

＊ ▒ 時間帯は授業のため利用できません。

3. 閉室日

①土・日曜日・祝日（振替休日を含む）

②本学創立記念日

③長期休業中の一定期間

（③については事前に掲示します。以上の他必要に応じ、臨時に閉室することがあります。）

4. 仕　様

①マッキントッシュ・パソコン　　16台

②プリンタ　　２台

③ＣＡＬＬネットワークシステム　　１式

5. 利用方法

利用者は、図書館４階テープ・ライブラリーカウンターで所定の手続きを行ってください。

①ライブラリー・カードを提出し、登録されたＩＤ番号を申し出、利用申込書を受取り、指示された５階のパソコン・ブースに行き利用して下さい。

②利用終了後は、パソコンの電源を切り、利用申込書に必要事項を記入し、テープ・ライブラリーカウンターに出して下さい。
ライブラリー・カードを返却します。
③ＣＤ－ＲＯＭ資料の利用希望者は、ＡＶ資料請求書に必要事項を記入し貸出し手続きを行って下さい。
④自習以外で利用を希望する場合は（教職員に限る）、利用の１週間前までに所定の手続きを行って下さい。

6. 利用上の注意

①飲食は厳禁、禁煙です。
②マスター卓のパソコン、機器等にふれないで下さい。
③収納されているソフトウエアの複写は禁止です。
④セットアップされているシステム、アプリケーション・ソフトウエアなどは変更したり削除しないこと。
⑤個人的に作成したプログラム、ディレクトリ、フォルダ、ファイルは、終了時にすべて削除して下さい。
⑥機器の故障、異常が発生した場合には、直ちに係員に連絡して下さい。
⑦故意又は過失により、機器等を汚損、汚染、損傷したときは、同じ機器を代納し、又は相応の代価による弁償をしなければならない。

7. 利用申込書

| | | |
|---|---|---|
| 日　　時 | 月　日　時　分　～　時　分 | |
| ＩＤ番号 | | |
| 所属・学科 | | 専攻（専攻語） |
| 氏　　名 | | |
| ブースNo. | | |
| 利用ソフトウエア | | |
| 利用インターネット | | |
| プリント枚数 | | |

8. 備え付け機器一覧

| ①自習ブース部 | | |
|---|---|---|
| （品名） | （型番） | （数量） |
| パソコン | PowerMacintosh 7200/90 | 10 |
| モニタ | AppleVision 1710 Display | 10 |
| パソコン | Centris 660AV | 6 |
| モニタ | Apple Multiple Scan 17 Display | 6 |
| プリンタ | Epson LP-8200 | 2 |
| ヘッドセット | SH-1 | 16 |
| ②マスター部 | | |
| （品名） | （型番） | |
| ネットワークシステム | CAI-ACE | 1 |
| パソコン | PowerMacintosh 8500/120 | 1 |
| モニタ | AppleVision 1710 Display | 2 |
| プリンタ | Epson LP-8200 | 1 |
| ＶＨＳビデオ | SVO－260 | 1 |
| ＭＤプレーヤー | LX－900 | 1 |
| アンプ | SV－Z360 | 1 |
| スピーカー | SB－F1 | 1 |
| ヘッドセット | SH－1 | 1 |
| ③サーバー部 | | |
| WEB Server | PowerMacintosh 7200/90 | 1 |
| モニタ | Apple Multiple Scan 17 Display | 1 |
| File Server | Centris 660AV | 1 |
| モニタ | Apple Multiple Scan 17 Display | 1 |

# 平成８年度（４月～12月）テープ・ライブラリー利用統計

視聴覚資料係

１．月別利用

| | ビデオ・ＬＤ | カセット | ＣＤ |
|---|---|---|---|
| ４月 | 1,000 | 103 | 49 |
| ５月 | 2,009 | 265 | 101 |
| ６月 | 2,293 | 294 | 129 |
| ７月 | 1,595 | 190 | 76 |
| ８月 | 315 | 20 | 9 |
| ９月 | 1,400 | 242 | 70 |
| １０月 | 2,026 | 391 | 122 |
| １１月 | 1,635 | 301 | 103 |
| １２月 | 1,331 | 211 | 83 |
| 計 | 13,604 | 2,017 | 742 |

２．利用の多かった資料

①ビデオ・ＬＤ

| | 資料名／監督 | 利用回数 | 資料番号 |
|---|---|---|---|
| 1 | レオン（'94）／リュック・ベッソン | 359 | Ｅ－735 |
| 2 | マディソン郡の橋（'95）／クリント・イーストウッド | 262 | Ｅ－736 |
| 3 | クイズ・ショウ（'94）／ロバート・レッドフォード | 185 | Ｅ－727 |
| 4 | アウトブレイク（'95）／ウォルフガング・ピーターゼン | 162 | Ｅ－730 |
| 5 | ライオン・キング（'94）／ロジャー・アラーズ | 161 | Ｅ－725 |
| 6 | スピード（'94）／ヤン・デ・ボン | 160 | Ｅ－703 |
| 7 | パルプ・フィクション（'94）／クエンティン・タランティーノ | 149 | Ｅ－706 |
| 8 | インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア（'94）／ニール・ジョーダン | 145 | Ｅ－707 |
| 9 | プレタポルテ（'94）／ロバート・アルトマン | 138 | Ｅ－729 |
| 10 | ミセス・ダウト（'93）／クリス・コロンバス | 110 | Ｅ－699 |

②カセット・テープ

| | 資料名 | 利用回数 | 資料番号 |
|---|---|---|---|
| 1 | TOEICリスニングの徹底対策 | 93 | Ｅ－683 |
| 2 | TOEIC標準問題集 | 65 | Ｅ－679 |
| 3 | 英検１級全問題集 '94年度用 | 57 | Ｅ－706 |
| 4 | TOEIC基本問題集 | 43 | Ｅ－682 |
| 5 | TOEICリスニング | 38 | Ｅ－681 |

③ＣＤ

| | 資料名 | 利用回数 | 資料番号 |
|---|---|---|---|
| 1 | グラモフォンＣＤベスト100 | 201 | ＭＣ－２ |
| 2 | 世界民族音楽大集成 | 60 | ＭＴ－12 |
| 3 | 最新映画音楽ヒット80 | 43 | ＭＰ－６ |
| 4 | 地球の音楽 | 27 | ＭＴ－14 |
| 5 | ポップス・イン・ジュークボックス | 22 | ＭＰ－37 |

# 新規購入映像資料（レーザーディスク）一覧

その12　　（1997年２月現在）

| 資料名 | 音声 | 資料番号 |
|---|---|---|
| The Lion King（ライオン・キング） | （英語） | E-0725 |
| Renaissance man（勇気あるもの） | 〃 | E-0726 |
| Quiz show（クイズ・ショー） | 〃 | E-0727 |
| Serial mom（シリアル・ママ） | 〃 | E-0728 |
| Pret a porter（プレタポルテ） | 〃 | E-0729 |
| Outbeak（アウトブレイク） | 〃 | E-0730 |
| Nadja（ナディア） | 〃 | E-0731 |
| Leon（レオン） | 〃 | E-0735 |
| The Bridges of Madison county（マディソン郡の橋） | 〃 | E-0736 |
| Jeanne La Pucele：les batailles（ジャンヌ　愛と自由の天使） | （フランス語） | F-0261 |
| Farinelli, il Castrato（カストラート） | 〃 | F-0262 |
| Les Films Lumiere（レ・フィルム・リュミエール） | 〃 | F-0267 |
| 写楽 | （日本語） | J-0233 |
| マークスの山 | 〃 | J-0224 |

AV　Journal　ー第27号ー

1997年３月28日発行

編集　大阪外国語大学視聴覚教育委員会
附属図書館視聴覚資料係
発行　大阪外国語大学
印刷　株式会社　一心社